

## 続々「子、親を選べず」その三



「之は自分で考えるしかない。まずは、自分で考えてみよう」と真之介君が考えをあっさり切り替えることにしたのは、その前にお父さんからこんな話を聞いていたからでした。曰く

「本を読むのもええが、その前に「まずは」自分の頭で考えてみる事や。できる限り己の想像力と推理力を使うてあれこれ、な。偉ろう、力付くから。本はその後のリトマス試験紙か修正調味料位でええね。

何よりもまず、己の頭で考えると自分の意見が持てる。視点が持てるのや。おまけに己の頭で考えるから、考えのステップがようけ、見えるのや。

わしは昔、入社したての頃に、仕事が解らんで、ノイローゼになった事があったが、ノイローゼで仕事から外されて暇になってもうて、仕事の本を読んでも、先輩のレクチャーを聴いても頭に全然入って来んし、他に方法も思い浮かばんから、その余った時間使って、一番泥臭く「自分なりの方法で一から考え直してみよう」思うてん。人が訊いたら「そんな事も解らなくなっているの」と呆れるレベルからや。

初めは解答不能なアイテム一つを理解するのに優に三ヶ月はかかった。次のアイテムが一ヶ月、その次が一週間。次第に早うなって、理解の仕方も自分が一番分かり易い方法も解ってきて、めっちゃ、役に立ったわ。

そして何より、之は無理やと思う様な難問が、自分の力で解けた時の喜びは格別なものがあったなあ。

「一つ一つ根本に遡って丁寧且つ具体的に考える」急がば回れ戦法や」

「しやけど、自分はおとうみみたいなスツポンの性格、ちゃうし、ノイローゼになる程真面目やないし」

「ほんなら、二弾目のエピソードや」

「まるで、多段宇宙ロケットや、な」

「お前、少しづつ成長しとうな」

「おとうでもお世辞言う事あんの？」

「学校を卒業して就職する前に、四国霊場88カ所、1200キロを歩いてお遍路さんした事があったんや。

当時からバスで、ちゃちゃつと手短に回る遍路の方法もあったが、なんや有り難みがない様な気がしたし、車で回ると道端のいろんなもんを見逃すような気がして歩いて回ったのや。ところが世の中には親切な人がおって、な、歩きでは大変やろうからとわざわざダンプを止めて助手席に乗せてくれたのや」

「ラッキー、やね。楽ちんになって儲かったね」

「勿論それに乗せてもろうたが、正直悔しくてならなんだ。これじゃ、完全踏破にならない。ズルした事になるう、おもうたんや。しやけど、好意を断る訳にもいかん。ほんま、悔しかったなあ」

「で、何よ？何が言いたい、ん？」

「んっ？そういえば関係ないなあ。わしも何が言いたいのか、解らん、なった。単なる思い出話や。呆けてきた。許せ」

途中から話が迷走してしまったものの、真之介君にはお父さんが言いたかった話のキモが何となく解かる気がしました。

「本ばかりに頼るのは、ヒッチハイクばかりする様なもので」

それがキモだったのだろうなあ、と。